

# 社会科授業カテゴリーブリックの開発

－思考力・判断力・表現力を育む社会科授業力向上についての研究－

所属校：大田区立久原小学校

氏名：木下健太郎

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：授業力向上・若手教員の育成・授業評価・授業カテゴリーブリック

## I 研究の目的

現在、大量退職・大量採用の時代にあり、若手教員が急速に増加している。勤務校の若手教員に今の一番の悩みを聞くと、やはり「日々行う授業について」が一番多い。とりわけ社会科については、若手教員に限らず、中堅やベテラン教員からも「社会科の授業が難しい」という声が聞かれる。Benesse が小学校5年生に行った学習基本調査(2006.6-7)によると、「好きな教科」は、51.9%と社会科が8教科1領域の中で1番低い結果であった。勤務校での調査でも、「授業が楽しい」と答えた児童の割合が45%と最も低い教科が社会科という結果である。社会科の授業に大きな課題があると考えられる。また、普段の若手教員の社会科授業を参観すると、今回の評価観点の改訂で重視されるようになった思考力・判断力・表現力を育てる授業とは程遠い、知識伝達型の授業も見られた。若手を中心とした多くの教員が社会科の授業について課題を感じ、悩みをもっていると考えられる。

そこで、本主題を設定し、社会科授業の課題と改善の方向性を示す「社会科授業のルーブリック(授業の評価基準)」のプロトタイプを開発して授業改善に活用することが必要であると考えた。研究を進めるにあたっては、その開発過程を明らかにするとともに、社会科を課題とする教員の、思考力・判断力・表現力育成を目指した社会科の授業力向上に対するルーブリックの有効性を検証したい。

## II 研究の方法

### 1 小学校社会科授業の課題の整理

#### (1) 基礎研究

小学校社会科の授業や授業評価に関する文献から、思考力・判断力・表現力についてと社会科の授業理論について研究を行った。また、社会科授業ルーブリックに関連する先行研究の調査も行った。

#### (2) 児童の社会科の表現に関するアンケート調査分析

児童の実態から、現在の社会科授業の問題点を探るため、アンケート調査を行った。所属校を含む都内・埼玉の15校、第3学年から第6学年1894人の児童のアンケートを集計した。

#### (3) 社会科授業の実態調査

現在行われている社会科授業の実態を把握し、その課題を発見するために授業観察と授業分析や若手教員へのインタビューを行った。その結果、社会科の授業における課題を明らかにすることができた。

### 2 社会科授業カテゴリーブリックのプロトタイプの開発

1の研究成果をもとに、社会科授業ルーブリックのプロトタイプを開発した。

### 3 社会科授業ルーブリックの有効性の検証

2で開発した社会科授業ルーブリックを活用して、所属校の若手教員2名を対象に、その有効性を検証した。

## III 研究の結果

### 1 小学校社会科授業の課題

#### (1) 基礎研究より明らかになったこと

「思考力・判断力・表現力とは何か」という概念規定は、学習指導要領では明確に示されておらず、各研究者や実践者がそれぞれにとらえている。また、授業評価の研究については、授業を構成する要素の全体像を明らかにした研究はなく、そこが授業評価の難しさであるということが明らかになった。

本研究で考える「授業カテゴリーブリック」についての先行研究は少なく、熊本大学教育学部附属小学校の「授業評価指標」、鹿児島大学教育学部の「社会科授業実践力診断カルテ」等のみであった。寺崎千秋(2010)の「授業力のルーブリック」は本研究に近く参考にした。

#### (2) 児童のアンケート分析より明らかになったこと

児童の社会科に関するアンケート分析より次のようなことが明らかになった。

○「自分の考えをまとめる時間が足りない」「書き方・話し方が分からない」ということ。

○社会的事象の意味を考え自分の考えを発表したり、友達同士で話し合ったりする活動が不十分である。

#### (3) 社会科授業の実態調査より明らかになったこと

社会科を苦手とする若手教員と社会科を得意とするベテラン教員の授業を観察し、比較することで次のような社会科授業の課題が明らかになった。

なお、授業を観察し分析する中で、授業を構成する

要素として時系列的に「A 授業計画力」「B 授業実践力」「C 授業分析力」「D 授業改善力」と分類できること、また、それぞれの過程で、各教科にも共通する部分が多い「基礎的・基本的な授業力」と「社会科特有の授業力」に分けられることも明らかになった。

	A (Plan)	B (Do)	C (Check)	D (Action)
基礎的・基本的	板書計画 発問計画 教材の作成等	板書 ノート 活用 KR 時間配分 学び合い 学習形態 等	評価規準 に即した 評価 等	基本的な授 業改善力等
社会科特有	問題解決的 な学習過程 の単元構成 資料の選択 人材活用等	資料提示方法 教具の活用 意思決定場面 の設定 調べさせ方等	単元に即 した社会 科の授業 評価等	社会科の授 業改善力等

#### (4) 本研究における「思考力・判断力・表現力を育てる社会科授業」とは

(1)～(3)の研究成果を基に、本研究においては、「思考力・判断力・表現力を育てる社会科授業」を次のように概念規定した。

社会的事象について、その意味や相互の比較・関連・総合を考えたり、未来や今後の課題解決に対して考えたりしたことを適切に表現する力をはぐくむ社会科授業

### 2 社会科授業ルーブリックのプロトタイプの開発

#### (1) 社会科授業ルーブリックの開発プロセス

開発手順は、「①社会科授業の課題より項目を立てる」「②その項目に対して『I：ほとんどできていない』から、『IV：十分にできる』までの具体的な教師の姿を設定する。」「③授業力向上の（次の段階に上がる）ための方策を設定する。」である。なお、プロトタイプとした理由は、ルーブリックは固定的なものではなく、本時のねらいや児童の実態、教師の実態等によって可変性のあるものだからである。

#### (2) 社会科授業ルーブリック

社会科授業ルーブリックは、寺崎千秋（2010）を参考にし、次のような形式をとった。

<授業実践力●社会科特有の授業力>		Keyword	社会的事象の調べさせ方
④	思考力・判断力・表現力を育むために、有効な社会的事象の調べさせ方になっているか。		授業力向上のための方策
I	思考・判断の理由や根拠となる社会的な事象について子供に調べさせていない。	I	単元の指導計画や本時の中に、子供が自分で資料を活用して調べる時間を設定する。
II	思考・判断の理由や根拠となる社会的な事象について子供に調べさせてはいるが、調べる視点が明確ではなく、何を調べて良いのかわからない子供や調べる意欲をもてていない子供がいる。	II	調べる視点を決め、何のために調べるのかを明確にし、途次意欲を子供にもたせてから調べさせる。
III	思考・判断の理由や根拠となる社会的な事象について、調べる視点を明確にもたせて、子供に調べさせている。調べる意欲をもてていない子供はほとんどいない。	III	子供が、必要な資料を教科書・資料集・図画等から自分で選択して意欲的に調べられるようにする。
IV	思考・判断の理由や根拠となる社会的な事象について、調べる視点を明確にもたせて、子供に調べさせている。子供は教科書・資料集・図画等から選択して意欲的に調べている。	IV	思考力・判断力・表現力を高めるために社会的事象の重要性を認識し、その指導方法等の研修の実践をリードする。

I：ほとんどできていない II：不十分な面や部分がある III：概ねできる IV：十分にできる I：リーダーとして他の教員を指導できる

### 3 社会科授業ルーブリックの有効性の検証

#### (1) 活用形態

社会科授業ルーブリックを活用する形態としては、

次のような形式が考えられる。本研究では②のペアチェックによって活用し、有効性を検証した。

活ユーザー	メリット	デメリット	ルーブリックの設定
①授業者自身 (セルフチェック)	いつでも行うことができる	独り善がりの可能性あり 思考力・判断力・表現力を育てる社会科授業についての深い知識が必要である	自分で理想的な授業を把握し、自分の課題に合わせてプロトタイプを改善する
②授業者+指導者 (ペアチェック)	セルフよりも客観性がある	指導者の力量に頼るところが大きい	授業者と指導者が協議していく中で、授業者の課題に合わせてプロトタイプを選択・改善していく
③授業者+参観者 (マルチチェック)	より広い視点での授業の検証が可能	ルーブリック事前協議に時間がかかる	研究テーマ等に合わせ、どの点を検証するの話を話したうえで、ルーブリックを選択し協議を行い改善していく

#### (2) 活用検証対象教諭

本研究では、所属校において社会科の授業を苦手としている若手教員2名に社会科授業ルーブリックを活用し、その有効性を検証した。

A教諭（5年担任）男性 初任者 体育を中心に研究  
B教諭（5年担任）女性 4年目 国語を中心に研究

#### (3) 活用手順

- ① 社会科授業を振り返り、協議の中で向上したいと思う授業力の評価項目を決め、本時ねらいに則してプロトタイプをもとにルーブリックを設定する。
- ② 各項目の現状を自己評価する。
- ③ 自己評価に合った「授業力向上のための方策（I→II等）」を読み、改善授業の計画を立てる。
- ④ 授業を実践する。
- ⑤ 各項目について自己評価をする。
- ⑥ 協議しながら授業力の評価が向上したところと向上しなかったところを分析し、次の授業に生かす。

#### (4) 成果と課題

検証授業を2回行ったが、社会科授業力ルーブリックを活用して協議を行うことで、自分の社会科授業の課題を明確に認識し、改善する方向性が分かったという感想が聞かれた。ただし、改善の具体的なイメージをもてるよう授業に合わせてルーブリックの記述を変えていく必要があるという課題も明らかになった。

### IV 考察

本研究において開発した社会科授業ルーブリックは、ペアチェックにおいては、授業の改善方向が明確になり、その有効性が確認された。セルフチェックにおいては、授業者にある程度の経験や知識等が必要であり、ベテラン教員については有効性が予想できるが、若手教員においては難しいということが考えられる。また、授業力の向上は短期間ですぐに効果が上がるものではなく、継続的にこの社会科授業力ルーブリックを活用して検証していく必要があり、今後の課題としたい。